

## 今週の為替相場見通し(2022年4月25日)

| 総括表      |      | 注 | 先週の値動き          |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|---|-----------------|--------|-----------------|
|          |      |   | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |   | 126.25 ~ 129.43 | 128.50 | 127.00 ~ 131.00 |
| ユーロ      | (ドル) |   | 1.0762 ~ 1.0936 | 1.0810 | 1.0600 ~ 1.1000 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |   | 136.47 ~ 140.00 | 138.87 | 137.00 ~ 141.00 |
| 英ポンド     | (ドル) |   | 1.2823 ~ 1.3090 | 1.2840 | 1.2650 ~ 1.2900 |
| (1英ポンド=) | (円)  | * | 164.65 ~ 168.43 | 164.99 | 163.50 ~ 166.50 |
| 豪ドル      | (ドル) |   | 0.7235 ~ 0.7458 | 0.7244 | 0.7100 ~ 0.7350 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | * | 92.99 ~ 95.75   | 93.08  | 91.00 ~ 96.00   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1)今週の予想レンジ: 127.00 ~ 131.00 円

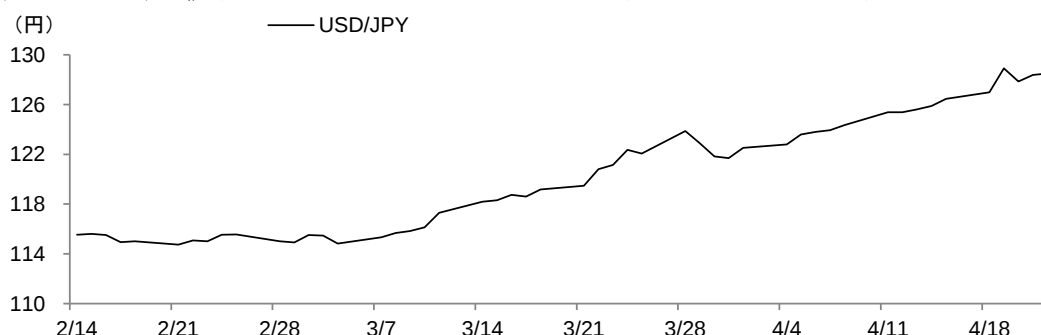
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

今週のドル/円相場は週半ばに129円を突破。週初18日、126.60円付近でオープンしたドル/円は東京時間にこれまで円安を容認してきた黒田日銀総裁の円安けん制発言を受けて一時週安値の126.25円まで下落。海外時間に入ると米長期金利上昇やブラード・セントルイス連銀総裁によるタカ派的な発言が支援材料となり、127円ちょうどをつけた。19日、ドル/円は米長期金利上昇と株式市場の堅調推移を横目に続伸し、129円手前付近までじりじりと値を上げ前日の高値を更新した。20日、ドル/円は日米金融政策格差を意識したドル買いに加えて、5・10日に伴う実需のドル買いから129.43円をつけ、約20年ぶりの高値を更新。その後はポジション調整の動きや米長期金利の低下から一時127円台半ばまで下落した。21日、ドル/円は前日の水準から反発し128円台後半まで上値を切り上げた後、ポジション調整の動きから127円台後半まで反落。その後は米金利上昇や複数のFRB高官によるタカ派的な発言にサポートされ128円台前半まで持ち直した。22日、日米財務相会談で協調介入議論のヘッドラインに円高が進展し、一時127.80円割れとなった。その後、黒田日銀総裁が円下落でも積極的な緩和を継続するとコメントしたとのヘッドラインで再び円安となり129.11円まで上昇。しかし、その後、円には言及していなかったとヘッドラインが修正されたほか、米株大幅安や米金利低下が重しとなり、128円台半ば付近まで戻し、128.50円で越週した。

今週のドル/円相場は前半こそ上値の重い展開を予想するが、日銀イベント通過後は再び円安進展を予想する。28日(木)に日銀金融政策決定会合と黒田日銀総裁の会見を控え、日銀スタンス変化への警戒感から上値の重い展開を予想する。日米財務相会談での協調介入議論があったとのコメントもあり、円売りは進みにくい状況と思われる。しかし、協調介入の議論が進んでいたとすると、緩和を継続しつつも急激な円安は回避したいという主張が通るようには思えず、緩和スタンスの変化を示す必要があると思われる。ただ、YCCの上限金利を広げたところで、米金利上昇ペースに比べれば、限定的であり、すぐに上限に到達し指値オペを連発する展開が予想され、結局、円安回帰の可能性もありそうだ。一方で、日銀金融政策決定会合で緩和スタンス継続が確認できれば、翌週の米FOMCによる利上げ期待から、再び円安が進展すると思われる。翌週は東京がGWに突入し流動性が落ちることもあり、円売り進展には留意が必要か。今週は26日(火)に米4月コンファレンスボード消費者信頼感指数、28日(木)に日銀金融政策決定会合、米1～3月期GDP(速報)、29日(金)に米4月ミシガン大学消費者マインドが発表予定となっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/18～4/22)の値動き: 安値 126.25 円 高値 129.43 円 終値 128.50 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.1000 137.00 ~ 141.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は横ばい推移。週初18日、1.0815でオープンしたユーロ/ドルは上値を伸ばすも場面もあったが、イースター休暇で取引参加者が少ない中、米金利上昇に伴うドル買いが重しとなり米国時間にかけて1.07台後半まで下落。19日、ユーロ/ドルは前日に続き米金利上昇を背景としたドル買いが優勢で一時週安値の1.0762まで値を下げ、その後も軟調地合いとなった。20日、カザークス・ラトビア中銀総裁が「7月利上げはあり得る」と述べたほか、ナーゲル独連銀総裁が「インフレ率が2%へ落ち着く公算は一段と小さくなっている」、「7~9月期の初めに利上げの可能性」と発言。ECB関係者のタカ派的な発言が相次ぎ、1.08台半ばまで上昇し、堅調推移となった。21日、ユーロ/ドルはデギンドスECB副総裁による7月の利上げ着手の可能性を示唆する発言を受けて一時週高値の1.0936まで急伸。その後は、米金利上昇に伴うドル買いに押され1.08台前半まで反落した。22日のユーロ/ドルは、ユーロ圏4月PMIが予想を上回るも反応薄く、米株下落に伴うリスク回避のドル買いに1.0771まで下落。その後は週末のポジション調整によるユーロ買いも入り、1.0810で越週。

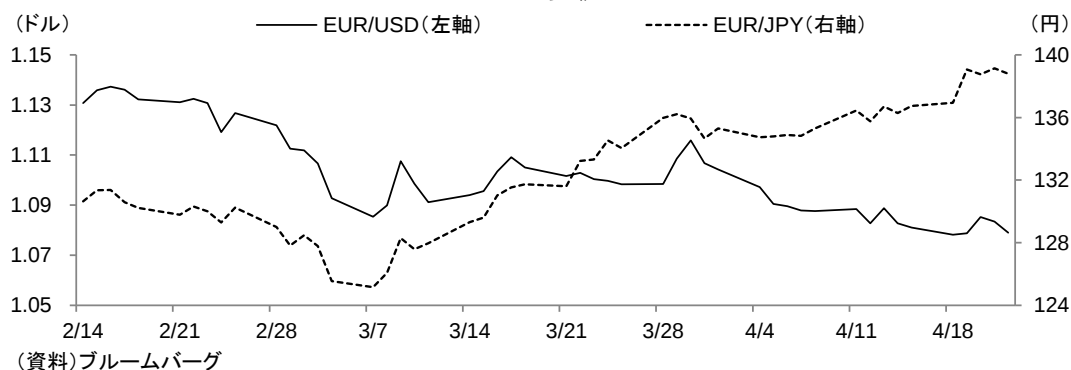
今週のユーロ/ドル相場は、ウクライナ情勢に引き続き注視しつつ、ECBのタカ派スタンスで底堅い展開を予想。24日に投開票された仏大統領選決選投票でマクロン大統領が再選される見通しとなったことも、不透明感の後退からユーロ買い材料となりそう。ウクライナ情勢については、5月9日の戦勝記念日を控えて、ロシアが一定の戦果を求め、東部で攻勢を強める可能性がある。情勢悪化が欧州の景気下押し圧力になるとの見方から、ユーロ売りが強まる展開も想定される。注目が集まるユーロ圏のインフレ動向については、4月1日に発表された3月ユーロ圏CPIが前年同月比で7.5%上昇。直近5か月連続で上昇率は過去最高を更新している。資源価格高騰が主な要因だが、エネルギーや食品を除くコア指数も3%と、ECBが目指す2%を大幅に上回る状況となっており、今週発表される28日(木)独4月CPI、29日(金)ユーロ圏4月CPIが注目される。4月14日のECB政策理事会では7~9月期の量的緩和終了方針が維持され、過度な引き締め観測は一旦後退したが、想定外のインフレが続けば早期緩和終了・利上げ観測が再び強まる可能性がある。3月発表のECBスタッフ見通しによれば、2022年度のユーロ圏物価見通しはメインシナリオで+5.1%と、2021年12月発表の+3.2%より+1.9%上方修正され、ターゲットの2%から大きく乖離。またECB政策理事会メンバーからは、7月利上げを示唆する発言が先週相次いでいる。当局者サイドのインフレ警戒感はい依然強い状況だ。また今週はユーロ圏1~3月期GDPの発表が29日(金)に予定されており、景気動向を見極めるうえでこちらの内容にも注目したい。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(4/18~4/22)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0762 高値 1.0936 終値 1.0810

(対円) 安値 136.47 高値 140.00 終値 138.87



## 3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2650 ~ 1.2900 163.50 ~ 166.50 円

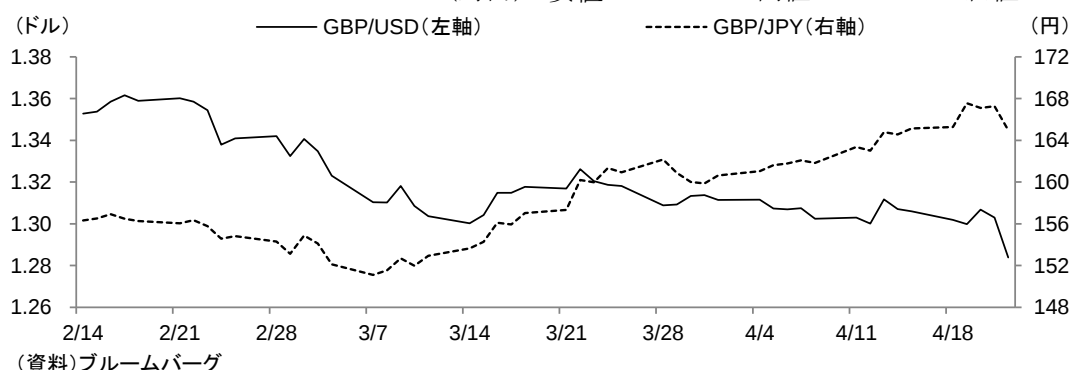
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは堅調気味の横ばい、対円では明確な上昇、対ユーロでは軟調気味の横ばいがそれぞれ先行したが、週引けを前に、全面急落に振れた。週明け18日は、英連休の最終日で、動意に乏しい膠着。連休明けの19日は、前日(18日)に鈴木財務相、日銀黒田総裁が相次いで円安けん制発言をしたにもかかわらず、逆に明確な円安が進行した。更に翌20日の日本時間朝、日銀が連続債券指値買い入れオペの実施を通知したことで、ドル/円は一時130円に迫る水準まで続騰。並行してポンド/円は165円台半ばから週の高値となる168.41円まで急騰した。引き続き、対ドルでは方向感に乏しい細かい上下動を続けたポンドだったが、21日、英中銀金融政策委員会のマン委員が5月の同委員会で+25bpを超える大幅利上げの可能性を検討すると述べたことを受け、対ドルで週の高値となる1.3091まで水準を切り上げた。それでも、並行して対ユーロでポンドが下振れしたのは、ラトビア中銀カザークス副総裁(20日)、独連銀ナーゲル総裁(20日)、欧州中銀デギンドス副総裁(21日)らが相次いで7月利上げの可能性を示唆したことが要因視された。22日のポンド急落は、発表された英3月小売上高の大幅下振れがきっかけ。対ドルでは、心理的な下値の目途だった1.30ちょうど、直近安値(4月13日の1.2973)を一気に割り込み、2020年10月来19か月ぶりの安値となる1.2823まで急落して、ポンド全面安をけん引した。22日の英国時間午後には、英中銀ベイリー総裁が、「英インフレは燃料価格(高騰)を要因に上昇する」などと、一見、追加利上げに積極的と読める発言をしたものの、ポンドの下落は止まらなかった。

今週の英ポンド相場は、続落を予想。先週末にかけ、単月の小売上高の不振にポンドをあそこまで明確に売り込んだ推移には違和感も強かったものの、おそらく、市場全般に、英景気の先行きに対する弱気な見方が急速に台頭しつつあるものと考えられた。19日には、IMFが、「G7の中で今後2年でインフレの最悪の衝撃に見舞われるのは英国」との見通しを発表していた。この発表時点では、ポンドは明確な反応を示さず、ポンド/円などはむしろ上述の通り急騰を見せていたが、小売上高の下振れが、いみじくもIMFの悲観的な見通しの信ぴょう性を高めてしまったのではないかと。また、上述、英中銀ベイリー総裁の発言は、物価上昇に警鐘を鳴らしながらも、同時に、景気後退懸念とのバランスを取ることが非常に難しいとの見解も示していた。必ずしも、単純に、積極的な追加利上げの可能性を示唆していたわけでもなかったと解釈できる。また、マン委員は、2月金融政策委員会で+50bpの利上げに投票した4人のタカ派委員の一人であり、同委員の上述発言が、必ずしも金融政策委員会の総意を反映しているとは限らない。今週発表予定の英経済指標は、26日(火)に英4月財政収支、29日(金)にネーションワイドの4月住宅価格など小粒だし、5月5日の金融政策委員会までに、各委員のスタンスに影響を及ぼすような英経済指標の発表は予定されていない。主要国の(追加)利上げに向けたモメンタムは、米連銀が最大で、絶対値では引き続き低位にあるものの欧州中銀の利上げ機運は盛り上がっており、対照的に英中銀が失速気味、日銀は利上げの利の字も見えないという構図にあるのではなかろうか。であるならば、通貨市場の序列も、当面はドル>ユーロ>ポンド>円という構図が基本で、実際の値動きは、この先、その構図を崩す材料がどれだけ出てくるのか?という目線で占うことになるのではなかろうか。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(4/18~4/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.2823 高値 1.3090 終値 1.2840  
(対円) 安値 164.65 高値 168.43 終値 164.99



## 4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 0.7100 ~ 0.7350 91.00 ~ 96.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは上に往って来いの展開。週初18日、0.7393でオープン後、米10年債利回りの上昇を横目に軟調に推移。中3月小売売上高が予想外に弱い結果となると、0.73半ばまで下押した。米債の売りが一服すると0.7380手前まで戻すも、世界銀行が「2022年の世界GDP成長率予想を従来の4.1%から3.2%に下方修正」と発表後は、再び軟調に推移し、NY時間に0.7343をつけた。19日、序盤は0.74ちょうどまで確りと推移するも、海外時間に米10年債利回りが2.94%台まで上昇する中で上値重く推移し、0.7350付近まで下落。20日、新規材料に欠ける中、米10年債利回りの上昇に一服感が見られ、ドル買いも落ち着いたことで、豪ドルは一日を通して底堅く推移。0.7370近辺から0.7457まで上昇した。21日、前日からの豪ドル買い優勢の展開が継続し0.7460手前まで上昇。しかしNY時間に入りパウエルFRB議長が「5月会合では+50bpの利上げが選択肢に入るだろう」と述べたことで米10年債利回りが上昇。ドル買いが強まると豪ドルは0.7370近辺まで値を下げた。週末22日、高止まりする米金利を横目にドル買い優勢の展開が継続。シドニーオープン後につけた0.7377を高値にじり安に推移。0.73台を割り込み、0.7244で越週した。

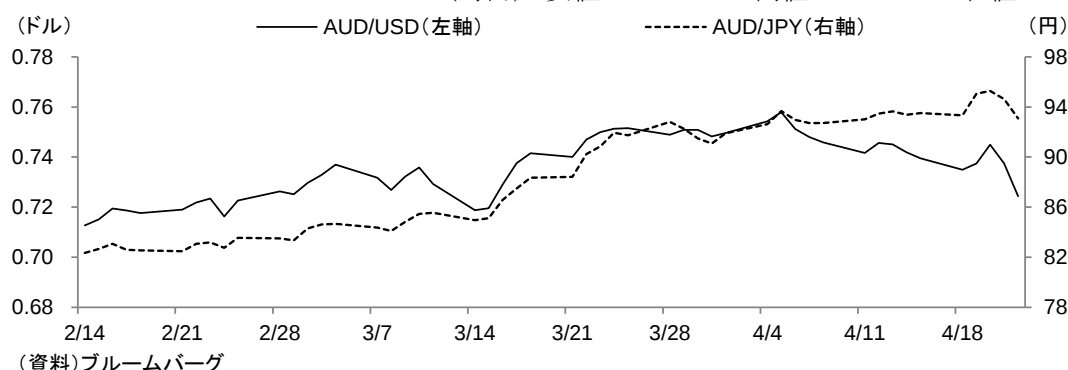
今週の豪ドルは軟調推移か。19日に公表されたRBA議事要旨では「インフレは今後も加速する」「インフレや賃金の進展が最初の利上げ時期を早める可能性」とコメントされ、また1～3月期の基調インフレが3%を超える見通しが示された。ウクライナ情勢やエネルギー価格見通しは不透明な中、早期利上げに前向きな印象であるが、Fedの+50bp利上げやQTなどの金融政策正常化の前では、市場に与えるインパクトは小さく、対ドルでじりじりと下値を掘り下げる展開を想定。今週は27日(水)に豪1～3月期CPI、28日(木)に豪1～3月期輸入物価指数/輸出物価指数の発表を控える。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(4/18～4/22)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7235 高値 0.7458 終値 0.7244

(対円) 安値 92.99 高値 95.75 終値 93.08



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。